

鏡台

二幕三場

岡田八千代

人

柏屋小玉（芸妓）

二十七、八才

柏屋香代（同）

二十四、五才

新太郎（特合若松の養子）

二十三、四才

片岡清之助（俳優）

二十一、二才

分川崎綾子（不見転芸妓）

十八、九才

お通（柏屋の下地ツ子）

十六才

柏屋のばあや

五十四、五才

箱屋

外に出入の職人二人

時

大正の頃

第一幕

柏屋の二階小玉の部屋、上手小別の部屋、上手手すり付廻り縁、まん中向うに箆筥、その上縁起棚、壁に長襦袢衣紋竹にかけてある。部屋の上手より長火鉢、縁側奥に階段ある心、下手外に塀と蔵の横手、土蔵と柏屋の間通路のつもり。縁近くに藤椅子一ツ、其の脇のかもいにかなりやの籠かゝる。塀のわきに花の咲いた桜の梢、雨上りの翌朝。幕開くと小玉（はつきりした顔立ち、芸妓島田）襟付のお召を着、片手にコートの脱いだもの、片手にキハツの瓶を持って上つて来る。

小玉 （コートを開げて）あゝひどいわね、（手すりに開けて掛けながら下を見て）おい／＼通ちやん。

お通 （下から）はアい。

小玉 あんたね、其傘を干してしまつたら一寸洗面器に水を持って来て頂戴。

お通 はい。

小玉在処へ戻り、衣紋竹から襦袢をとりキハツにて襟を拭く。

小玉 (襟をふきながら時計を見て) あらもう九時過ぎたわ、ちよいと香代ちゃんまだ起きな

いの、あんたの試験十一時じゃないの、支度しないと遅くなるわよ、ねえお香代さん。

小玉 立つて上手の部屋の襖を開けようとするが開かない。

小玉 いやだ開かないわ、どうしたのよお香代さん、こんなとこ締りをしていやな人。

香代 (中にて) あいあい、今開けますよ。

小玉 冗談じゃ無いよ。(ぶつぶつ言いながら元へ戻り、又せつせと襦袢を片ずける)

お香代、部屋から出て来る。(何となく弱々しそうな女、結蝶がえし) 寝間着の上に半纏を引きかけながら出て来て、生あくびをし乍ら火鉢の側へ来て直ぐ煙草をのむ。

小玉 あんた大丈夫? 早く支度をしてもう一度位さらつて行かなくちや駄目よ。

香代 馬鹿々々しいわね、若い妓じやあるまいし、今更試験なんて。

小玉 だつてそれは仕方が無くてよ、あんたは三年も小田原くんだりまでも落ちていたのだも

の、今度帰り新参で出ようというのだから新しい子と同じに見られるのは我慢しなくちやならないわ。それに此頃はとても御出先がうるさいのだから。

香代　うるさいのはお婆さん連の直木さん達よ、自分達だつてろくそつぽ出来もしないのに役員ずらが可笑しいわ、私だつて金がありや役員さん達に袖の下をつかつてごまかす法もあるけれど、仕方がないわ。一体こんな時若旦那が何とかして呉れてもいゝ筈よ。

小玉　（びつくりしたように）　若旦那てあなた新太郎さんの事かい？

香代　そうよ。

小玉　それがお前さんのいけない所だよ、新太郎さんがまだこの家の息子であつた頃、どんな事があつたにしても、今では若松と言うれつきとした待合の養子だよ、もうお前さんなんか振りむいても見る筈がないじゃないか、第一お前さんはあの若旦那の事が元で此土地にも居られなくなつたんだよ、少しは辱という事も知るもんよ。

お通、洗面器を持って上つて来る。桃割れに結つた眼の美しいぼうとしたような子。

お通　姐さんどこへ置きます。

小玉　あつちの縁側へおいといて頂戴。

お通 (洗面器を上手の縁においてから) お香代姐さんお早うございます。

香代 (お通の挙動をじつと見ていたが) お早う、通ちゃん一寸此処へお出で。

お通 (側へ来て膝をつく) はい、何か御用?

香代 ちよいと私の顔を御覧。

お通 はい(まぶしそうに香代を見る)

香代 お前さんいつから出るの。

お通 この暮あたりからつて伺つてますけれど。

香代 お前さんあたしが田舎にいつてる間にすっかり綺麗になつたね。

お通 いやですわ妓さん。

香代 いくつになつたの。

お通 十六です。

香代 (しげしげと見て) 成程ね、もうすつかり大人だ。

お通 知りません。(急いで下へ下りる)

小玉 どうしたのさ、

香代 姐さんは気がつかない、初めて男を知つた女の子は歩きつきが違うと言うわよ、あの子も確かに違つてよ。

小玉 何を言つてるのさ、厭らしい。

香代 いゝえ私は知つてるのよ、昨夜も若旦那があの子の部屋から出てゆくのを見たわ。

小玉 まさか、いくら此処のママが熱海行で留守だと言つたつて、そんな事があるものかね。

香代 いゝえほんとなんです、その癖あの子はあの子を手なずけて裏梯子から私の所へ毎晩のように来るのです。

小玉 (驚いて) まああきれた、私が此部屋にいるのに。

香代 だつて姐さんは毎晩のように宴会で三味線を弾きまくつて遅く帰て来ちやアぶつ倒れるように寝てしまうのだから、……私一度位姐さんが目を覚まして何とか言つてくれそうなものだ何度思つたか知れやしない。

小玉 そんなら私を起せばいゝじやないか。

香代 ……

小玉 (怒つて) 辱しらず!

香代 私が?

小玉 両方ともよ、いくら新太郎さんが好い男か知らないけれど、私あんな無責任な男大きらいよ、おまけにお前さんはあの人よりも年上よ。それにお前さんが此土地にいられなくなつたのもあの人を為だと言うことを忘れたの、そう考えたらいくら若旦那が何と云おうと

そんな事は出来ない筈よ、此家へ帰れたのだつて、このママさんがのんきな人だし、旦那が此土地の口利だから何とかごまかして呉れたのだけれど、外の家だったらとても出来る事じゃないのよ、それなのに、又よりを戻すなんて、呆れてものも云われない。

香代　だつて、私は此家が初奉公の店だし姐さんがいるのも、とても外の家へなんか行か
れやしない。私はお前さんが頼りなんだわ。

小玉　もう、いや、いや、お前さんのようならしの無い人きらい。

香代　そりや姐さんは芸はあるし、片岡つて可愛い、人があるから楽しみもあるうけれど。

小玉　何だつて？

香代　いゝえ好いの、私はお金は無いし、みよりは無いし……。

小玉　お前さんはあの人のおもちやになつてるんだよ、あの人はね、昔のような何も知らない
若旦那じゃないよ、その上養子先がパリ〜の待合さんだからそれをえばにして此頃じゃ
全で違つた人になつてるんだよ。

香代　だから私、もう裏梯子へもこの襖へも鍵をかけてしまつたのよ、それで好いじゃないの。

小玉　（時計を見て）もういゝ、もういゝその話は又あとでするわ、それよりもあんだ、一度さ
らつて見たらどう？　道成寺の合の手でしよう？

香代　大丈夫よ。

小玉 大丈夫じゃなくてよ、やつて御覧なさいよ。さア、チンチリレンツントツツルツン〜。

と云い始む。それに連れてお香代も口三味線でつける。少しいつて後戻りする。

小玉 そらそらお定めよ、もう一辺。

香代 大丈夫、心配しなくても、兎に角私顔洗つて来るわ。

お香代逃げるように下へ下りる。小玉、物足らぬ心持をもちながら、長襦袢を畳む。その間に下の格子の音、間もなくお通が封書を持って上つて来る。

お通 姐さん、塗長さんですつて、おあつらえのものは昨晚先方様へお届けいたしました。そ

してこれを（封書を出し）お返事を待ちますつて。

小玉 （封書を開いて見て）厭な奴！ こつちから行きますつてあれ程云つてあるのに。いゝわ私行く。

小玉、封書を其の儘にしてお通と共に下りてゆく、行きちがいにお香代上つて来る。

暫く階段の上口に立つて下の様子を見ていたが、座敷へ入つて封書を開く。

香代

まア、五百円也、古代模様蝶貝入鏡台、片岡様お届け、まア清ちやんのだわ、あの人お金も無い癖に。(封書を持ったまゝ慌てたように上手の部屋に入り、間もなく封筒に何か入れながら出て、元の所に置き、鏡台の前へ座る)

小玉上つて来る。

小玉

馬鹿にしてるわ、私の云つた通りにしないから追いつてやつたわ、(云いながら封筒を取り上げ又開く、中から金が落ちる)あら、お金(不審そうにお香代を見る。お香代そしらぬ顔で化粧をしている)

小玉

お香代さんあなたね、こんな事をしたのは。

香代

(向う向きのまゝ)いゝじやないの丁度あつたんですもの。

小玉

いや、いや、こんな事厭よ、あなただつてこれからお金がかゝるのよ。私だつて何も宛なしにこんな事しやしない事よ。第一、あんたこんなお金どうしたの、まさか若旦那に貰つたんじゃないでしょうね、あたしが片岡にしてやるのはあの子を弟のように思うし、あの

子も私を姉のように慕ってくれるからなのよ、その子が今度名題になるんだもの、姉として何かしてやり度いのよ。そして其用意もしてあるのよ。それだのにこんなお金、あんた一体どうしたの。まさかあの人に貰ったんじゃないでしょうね。そりやお前さんも昔の人だから恋しくもあろうし逢いもし度いでしよう。それは仕方が無いと思う事よ。けれ共金でころんだのでは私いやなの。そんな事をするあんたなら私軽蔑してよ。汚らわしいわ。

香代

もう好い事よ！（お香代突然立つて金をつかみ自分の部屋に入り襖をしめる。かなりや啼く）

小玉

（暫くじつとしていたが、立つて襖の側へ行く。が襖は開かない）お香代さん、私何もお前さんに恥をかゝそうとしたつもりはないのよ。もし私が間違っていたら御免なさい、ねえ香代ちゃん、私は私の力であの子を立派に祝つてやりたかつたのよ、だからあんなの親切を無にしたのは悪かつたわ、御免なさい、そりや私は変り物で、芸で稼ぐ女だから、お金がないと思つてくれるのは有難いの、けれども、もし其お金があの人から貰つたのだと私心配なのよ、あの方は昔のような純真な人では無くなつてゐるのよ、私何だかあの方が此頃では恐いのよ、少し気がどうかしてゐるのでは無いかと思う時だつてあるわ、だから怖ろしいの、だからお前さんの事だつて心配なのよ。

此間に新太郎足音を忍ばして上つて来る。そして籐椅子へかける。

新太郎 (二十三才和服、美男、少し酔っている) 玉ちゃん、何が心配なのだい。

小玉 (驚いて振り向く) まあ、若旦那の話を持ち聞くなんて卑しい事をするもんじやありませんよ(直ぐ襖の側を離れて火鉢の所へ行く) 足音を聞かせないような歩き方をする人私大嫌い、それに此処は私の部屋ですよ、無暗に上つて来て貰い度くないわ。

新太郎 (ニヤニヤしながら、お香代の部屋の方を顎で指しながら) 裏から上つて見たんだけれど開かないのさ、だから一寸こつちから通して貰おうと思つてね(火鉢の側へ来て煙草をふかす)

小玉 お香代さんの部屋に何の用があるんです。

新太郎 一寸忘れものしたんだよ。

小玉 どうしてお香代さんの部屋に忘れものなどしたんです。

新太郎 野暮を云うなよ、だからお前さんには旦那が出来ないんだよ。

小玉 大きにお世話です、兎に角あの人も折角この土地から又出ようと云うんですから恐い噂は立てさせ度くないんです、あの人だつてあなたを厭がつているんですよ。

新太郎 ふん、一緒に寝てない時はね。

小玉 よして下さいそんな事。

新太郎 おゝ怖。(藤椅子に戻る)君には此味は分らないさ。とに角お香代は俺を昔一人前の男にしてくれた大恩人だからね、お互いに忘れられないのさ。

小玉 あの人をそんな風に云わないで下さい。私、あなたは嫌いです。

新太郎 いやだくは可愛の裏よつて小唄があるじゃないか、君だつて今に僕でなくちやならな
い時が来るよ。

小玉 まつ平です、朝つぱらから酔つた顔をして何事です。ママさんに言いつけますよ。

新太郎 おふくろは旦那と熱海へしけ込みさ、俺の事なんざ忘れてるよ。(とうそぶいて煙草をふ
かす)

小玉 (その間にコートの裾など拭き何かと片づけている)私今日は此部屋の大掃除をするん
ですから失礼ですがお帰りになつて下さい。

新太郎 (動かず)どうも済みませんね。大掃除をして片岡清之助の名題披露の前祝いでもある
のかね、幸いおふくろは留守だし。

小玉 知りません。

新太郎 君は清公に素晴らしい鏡台をこしらえてやつたそうだね。(小玉驚いて目を見張る)もう

ちやんと御注進があつて分つてるよ。いゝじやないか。出来たてのほや／＼を拝見して来たものがあるんだ。何でも蝶貝入の素的な奴で、塗長が腕をすぐつてこしらえたのだったな。あんなちんぴら役者には過ぎたものだ。だが、かんじん要の注文主が見ない中に外の女に見せてしまうなんて彼奴も余程礼儀知らずだよ。

小玉 誰です。

新太郎 分川崎の綾子さ。

小玉 綾子ですつて？

新太郎 驚いたろう、あいつは仕様のない不見転芸者だけれど、器量にかけては此土地でも一と云つて二と下らないね。それに清之助とは幼な馴染だそうだよ。同じ町で育つて小学校も同じだったんだとさ。それが計らず此土地で逢つて、これは／＼と云う次第さ、若い者は若い者同志だ、清公の奴嬉しさのあまり、第一番にあいつにしやべつたんだね。(とぼけて) あゝ悪気じやあるまいよ、だから叱言は云わない方が好いぜ。嫉くことア無いさ。

小玉 私は何も清ちやんに厭らしい氣持なんか持つてやしません、あの子に若い友達があらうと無かろうと……私は只あの子を弟のように。

新太郎 分つてるよ分つてるよ、綾子はほめていたよ、素晴らしい姉さんだつてさ、——それで何時だい清公の名題披露は？ 今月は旅だそうじやないか旅に行かれちや姉さん淋しいだらう。

小玉 (黙っている)

新太郎 何しろまだ子供だからね、云つて見りやア年増女の恋愛なんてものはまア母性愛の変形

見たいなものだからな、坊やにおつぱいが吞ませたいのさ、

小玉 誰の事を云つてるんです。

新太郎 勿論君の事さ。

小玉 馬鹿になさらないで下さい。

新太郎 ひどく嫌われたものだね。

小玉 私はお香代さんが可哀いそうなんです、あなたはもう立派な家の若旦那なんですよ、しがない女をいじめないで下さい。憎らしい。

新太郎 君はそんなに僕が憎いのかね。

小玉 憎いわ、男なんてほんとに憎い。

新太郎 君のように男嫌いを看板にしてる奴が飛んでも無い事になるのさ。

突然次の間から着物を着変えたお香代出て来る。

新太郎 おやお出かけかい？。

香代 (立つたまゝ) 朝つぱらから御機嫌ね。

新太郎 (少し照れて笑う)

小玉 もう好いの、じゃ出かけましょう。

香代 姉さんもお出かけ。

小玉 あゝ一緒に行つて一寸役員さん達に顔を出して来よう。(疊んであつた羽織を着る)

香代 (嬉しげに) そう、有難いわ。

新太郎 おいゝ俺をほつぽり出して行くのかい?

香代 好いじゃありませんか、あんたにはお通ちゃんと言う若いのがいるのだもの、しみつたれた下地つ子がさ。

新太郎 なんだあんなしよんべん臭いの。

小玉 ママさんがいつ帰つて来るか分らないからいゝ加減に帰つて頂戴。

新太郎 はい、はい。

小玉 さア行こう。

二人新太郎は構わず下りて行く。新太郎「フー」と云つた様子で煙草をふかす。格子戸の鈴の音。近所の家から稽古三味線がポツンポツンと聞え出す。新太郎「などと

云つたもおこがましい、つき出されぬ中こつちから、切り上げ物がいちヨンく幕」
など鼻唄にて立ち上る。

お通、そつと上つて来る。新太郎の方を見ぬ様にして洗面器の側へ行こうとする。

新太郎 おいくゝ何処へ行くんだ。

お通 (立ちすくんで) あの…あの洗面器を取りに来たんです。

新太郎 嘘をつけ、二人が出て行つたのを見すまして俺に逢いに来たのだろう。

お通 いえそんな事はありませんわ。

新太郎 まアー一寸ここへ来いよ。

お通 厭ですわ、若旦那は私をひどい目に合わすんですもの。

新太郎 いつ俺がお前をひどい目に合わせた？

お通 昨夜だつて。

新太郎 なに？ なに？

新太郎 立つてお通の側へゆく。

新太郎 まア一寸ここへ来い。

お通おずく側へ行く、新太郎突然お通の手を取って引き寄せる。

新太郎 もう一辺云つて見な、昨夜がどうした。

お通 知りません。

新太郎 どう酷い目に合わせた、嬉しがつていやがった癖に。

お通 知りません。

新太郎 おいこつちを見ろ、俺の目を見ろ、（真実そうに）そう、お前は全く綺麗な目をしてるぜ
（やさしくお通のまぶたに接吻して）誰もお前に今迄そんな事云つたものは無いかい？

お通 いゝえ——若旦那だけですわ。

新太郎 うまく云つてるぜ、どうだい昨夜はあれからよく寝たかい？

お通 いゝえ。

新太郎 どうしてだ。

お通 だつて若旦那が又お香代姉さんの所へいらつしやりやしないかと思つて……

新太郎 嫉くのか？ 一人前らしい事を云つてるぜ、雛ツ子の癖に。

お通 だつて……。

新太郎 (お通の両手を押えて、少し凄味に) どうした、うまく演つたか、俺の云いつけた通りに。

お通 (うなづく)

新太郎 いつ？

お通 今朝、夜の明けない中、若旦那がお帰りになつてから。

新太郎 それで？ ……どう云う風にやつたんだ。

お通 (少し考えてから) うまく云えませんわ。

新太郎 灯を点けて行つたのか？

お通 いゝえ廊下の様子は知つてますし、おはなれへ行つたら欄間からもう夜明けの薄あかりが映つていて能く見えましてわ。

新太郎 指輪は何処にしまつてあるんだ。

お通 おかみさんの机の脇の用筆笥の曳出しの奥のかくし筆笥の中ですわ。

新太郎 お前はそれを前から知つてたのかい。

お通 いつでもおかみさんは宝石をその中にお入れになるんです。

新太郎 鍵はかゝつて無いのか？

お通 おかみさんはのんきだから、何処にも鍵なんかかかつてませんわ。

新太郎 ふん、それから？

お通 指輪を二つサックから出して若旦那のおつしやつた様に自分の指へはめましたわ。

新太郎 (後からお通を抱くようにして指を押え) この指へだね。

お通 (のがれて) 誰か来るといけませんわ。

新太郎 みんな出かけてしまつたんだ、誰が来るものか。

お通 でも……。

新太郎 指輪はどんなのだつた？

お通 分りませんわ。

新太郎 光つていたかい？

お通 え、暗くてもキラ／＼してましたわ、あれダイヤモンドつて云うのかしら。

新太郎 (叱るように) そんな事はどうでも好い、おふくろが帰つたら直ぐ知れないか。

お通 大丈夫ですわ、おかみさんは捲えるばかりでめつたにおはめになりやしませんもの。

新太郎 でもその中には気がつくだろうな。

お通 でも若旦那が盗んだとはお思いになりませんわ。

新太郎 (急にお通をつき放して) 何だと? 俺が盗んだ? いつ俺が盗んだよ? 指輪はお前が盗ったんじやねえか。

お通 (素直に) え、そうですわ、あたし、いくら誰に責められたって若旦那が盗んだなんて云いませんわ、あたし縛られたって……

新太郎 (冷淡に) あたり前よ、それで指輪はどうしたんだ。

お通 若旦那のおつしやつた所へしまつておきました。

新太郎 何処だ。

お通 おかみさんの筆筒の上の人形箱の中の道成寺のお人形の袂の中ですわ。

新太郎 うまくやれたか?

お通 うまくやれましたわ。いつ出しにいらしても大丈夫よ。誰も知らないもの。

新太郎 (怒るように) いつ俺が出しに行くと言った。

お通 (あわてて) おつしやりやしないけど。

新太郎 (手を離して) もうよせ、指輪の話はもうしまいだ。誰にも関係の無い事だ。いゝか。さ、もつとこつちへお寄り。

お通 いゝえ、誰か来るといけませんわ。

新太郎 それじや又晩に行つてやるぜ。

お通 だつて……

新太郎 お前は洗面器を持ってゆけ、俺は一寸あそこで一と寝入りする。

お通 あらまだお香代姉さんのお床片づけてありませんわ。

新太郎 だからなお好いじゃねえか。

お通 でも……

新太郎 貴様嫉いてるのか。

お通 (じつと見る)

新太郎 早く洗面器を持ってゆけ。

新太郎 お香代の部屋に入る。お通、洗面器を取りに行く。

新太郎 (又顔を出して) おい、誰か来たら裏梯子から教えるんだぞ。いゝか。

お通 うなずき洗面器を持って立とうとする。この時格子の開く音がすると同時に「こんにちわ」と云う元気の好い声がして、直ぐ梯子段を上つて来る音がする。お通 お香代の部屋へ行こうとするが間に合わない。

片岡清之助 (美少年言葉使いに女らしい所がある) なんだいお通ちゃん此処にいたの、泥棒が入るよ。

お通 あらいらつしやい。

清之助 姉さんは？

お通 あの、お香代妓さんと一寸見番へ。

清之助 (思い出したように) あゝ今日試験ね、なかなか帰らないかしら。

お通 いゝえ、小玉妓さんは直ぐお帰りになるでしょう。

清之助 僕ね、今夜急に旅へ立つ事になつたんで知らせに来たんだ。

お通 あら今夜？

清之助 いゝよ僕待つてますよ、お前さん用を足しておしまいよ、僕持つてつて上げようか。

お通 いゝえ宜しいんですよ。

その時下から、「ちよいと清ちゃん、上つても好いの」と云う若い女の声がする。

清之助 いゝよお上んなさいよ姉さんいないけど。

綾子 (二十位、目の覚めるような美人 中高島田派手な衣装) 御免なさい。

綾子 上つて来る。お題「いらつしやい」と云いながら綾子を見返りながら下りていく。

綾子 好いかしら留守なんぞに上り込んで小玉妓さんうるさいんでしよう？

清之助 いゝよ、僕の仲好しだつて云えば喜ぶよ。

綾子 だつて私は場違いですからね。一流の姐さんと膝を並べるわけには行かないのよ。お香

代姐さんは？

清之助 今朝手見せがあるんで行つてるんだ。

綾子 あゝそうく、でも厭でしようね、今更——でもね、あの人もあの人も、もう若旦那と焼

ぼつくいだつてさ、だらしが無いわね。

清之助 あら、誰に聞いたのそんな話。

綾子 当の若旦那から聞いたんだから確よ。

清之助 まア若旦那もひどい事をしやべるのね、うそだろう、お前さんの岡焼だろう？

綾子 誰があんな篤！

清之助 それじやいつ聞いたの、どこでどんな場合に？ 寝もの語りかい？

綾子 知らない、子供の癖に生意気な事云うもんじやないわよ（怒つて側を離れる）

清之助 お前さんの怒つた顔僕とても好きだ、一層綺麗になるね。

綾子 お世辞云つてるわ、お前さんなんかはね、小玉姉さんに甘えてりやいゝのよ。坊やの癖に。

清之助 もう其坊やはよして下さいよ。

綾子 だつてそうじやないの、お前さんはニタ言目には姉さんが姉さんがつて云つてるじやないの、姉さんがいなくちや夜も日も明けやしない。

清之助 だつて姉さんには恩があるんだもの、僕をこれだけにしてくれたのも姉さんのおかげなんだもの。

綾子 だから、お前さんは姉さんに甘えてりや好いのよ。ふん、お前さんは自分の力を知らないのよ、小玉姉さんなんか無くたつて立派に名題になれる人よ、あたしなんか出は悪いし誰も力なんか貸してくれる人なんか無いけれど、自分の力でここまで来たのよ、一流の人とはお出先は違うかも知れないけれど、一流の人に負けない生活をしてやるわよ。

清之助 でも……

綾子 でも不見転芸者じやアと云いたいんでしよう、エエ結構よ、私はね、私が綺麗な中に何

でも好きな事をするのよ。私はお香代姉さん見たいに、まだ出もしない癖に、かくれ遊びなんかしないわよ。又小玉姉さんは小玉姉さんで芸は出来るでしょうよ、だからと云つて、あれは厭だ、これは厭だと撰り好みしてる中に捕えたのがお前さんじゃないの、赤んぼ見たいなものを捕えて、あつち向け、こつち向け、おいち二の三、お前さんはでくの坊にあつかわれてるのよ、それどころか（鳥籠を見て）そうそう、あの鳥籠に入れられて飼われてるかなりやよ。かなりやだつて、始めつから籠の中に飼われていた鳥じゃないわよ、野原に置いとけばもつと強くなる筈の鳥に違いないわ、お前さんはあの籠の中のかなりやと同じにえさを飼われて喜んでるのさ、自分の力も知らないでさ。

清之助　だつて僕はえさも何にも無かつた時があつたんだ、子役でね、お祖母さんとたつた、二人ちづかまつて暮してる時拾い上げてくれたのが小玉姉さんなんですもの、その恩を忘れちや済まないわ。

綾子　恩は恩、力は力、いつまで恩にからんでいたら出世は出来ないわよ。何だいあんな鏡台、あんなものでチン／＼させられてるお前さんが齒がゆいわ。

清之助　何もそんなにあの鏡台にこだわる事無いじゃないの。

綾子　何も鏡台なんかにこだわつてやしない事よ、お前さんなんか大歌舞伎へ出て役をつけられりや、どんなおやまだつてくそ喰えだわ、でも小玉姉さんはお前さんをあんまり出世さ

せたくないかも知れないわね、そしたら、もうお前さんを自分のおもちやには出来ないからね。

清之助 もうお止しなさいよ、そんな事人に聞かれると僕が困るよ。

綾子 誰が聞くの？ 聞く人なんか無いじゃないの。

とたんにお香代の部屋で何か音がする。

清之助 あら、誰かいるのかしら？

綾子 いる筈が無いじゃないの、臆病ね。

清之助 しつ！（手で制して足音を忍び上手の部屋をうかがい、綾子を招く）

綾子 （側へ行き）何なの？

清之助 （声を忍ばせて）誰か寝てるらしいよ。

綾子 誰でしょう？（二人じつと立つ）

新太郎 （お香代の部屋から）おい、人気役者。

二人顔を見合す。

綾子
清之助 } (同時に) わ、か、だんな？

綾子 どうしたんでしよう。

綾子、ずっと下手へ清之助を連れて来て、

綾子 云つとくけどね、あの人の云うこと何にも信じちや駄目よ。出たらめなんだから。

云い捨て、そつと二階を下りようとする。

新太郎 (出て来て) おい、逃げなくてもい、ぜ。

清之助 お早うございます。

新太郎 何を二人で謀らんでるんだ、べちやくちややかましくて目が覚めちまつた。

綾子 若旦那、いつづけですか、お安くないのね。

新太郎 何を云つてやがる、手前こそこんな男を喰え込んでどうしよう云うんだ。小玉は格式

がうるせえぞ。

清之助 そうじや無いんです。僕が連れて来たんです。一度小玉姉さんに逢わし度いと思つて。

新太郎 よせく、余計な事をする、小玉にどんな目に逢うか知れないぞ、あの女はお前をそれまでにしたのは自分一人の力だと思つてるんだ、なまじ他人なんぞが手を出すとお冠になつてしまうぞ。

清之助 でも之からの事もありますし一度姉さんに……

新太郎 それが間違つていると云うのだ。綾公と小玉とは芸者が違ふのだ。格が違ふよ。

綾子 若旦那はひどく小玉姉さんの肩を持つのね。

新太郎 あたり前よ、小玉はこの土地切つての大姐さんだ。お前見たいな不見転芸者とは訳が違ふよ。

清之助 若旦那、そんな事を――

新太郎 黙つてろ、手前なんぞ、誰のおかげで一人前になつたと思つてるんだ、小玉が影見につき添つていたからだ。

清之助 それじやア……（私には何にも力が無いのかと云う意）

綾子 およしなさいよ。若旦那は酔つてるのよ、私、帰るわよ。

清之助 でも切角来たんだから姉さんの帰るまでいて下さいよ。

新太郎 此所はお前の家じゃないぞ、主人ずらするな。

清之助 ねえ若旦那、綾ちゃんは今度私の鏡台前のものすっかり揃えて呉れたんですよ。だからその事も一寸姉さんに。

新太郎 それがお前の了見ちがいだよ、小玉は何も彼も自力の手でやり度いのだ。

清之助 けれどもそれじゃあんまりすみませんもの。

新太郎 子供が何を云うか、お前はじつとして、お膝に手を置いて口をあんぐり開いてれば好いんだ、それが小玉の望む所なんだよ、生意気につまみ食いなどすると。

清之助 そりやアあんまりですよ若旦那、私だつてもう一人前です、少しは自分の考えだつて。

綾子 そら御覧なさい、お前さんは籠の鳥さ、籠の中にいつ迄も飼われて年をとるのが好いよ。さよなら。

新太郎 待て待て。

綾子 何です。

新太郎 晩に待ってるぜ、いつもの所だお前の欲しがってるダイヤモンドが待ってるぜ。

綾子 まあ若旦那、たつた今お香代さんの中から抜けて出たばかりでよくもそんな事が云えたものね。

新太郎 (それには知らん顔で) おい君、清ちゃん、僕はね、此頃不思議な研究をしてるんだよ。

僕が命令するとどんな奴でも俺の云う通りになるんだ。ある者にあれを盗つて来いと云えば泥棒でも何でもするんだ。

綾子　まア気味の悪い。

新太郎　黙つてろ、お前だつて僕の云う通りになるんだ、俺の云う事を聞かないと忽ち天罰があるぞ。

綾子　あたし、帰らして貰います。

新太郎　お前はこの役者を放つて行くのかい、籠の鳥をよ。

綾子　あたし人のものに手出しなんかしませんよ。

新太郎　うまく云つてるぜ、僕は嫉いて云うんじや無い、坊やは母アちゃんのおっぱいにそろくく
倦きて来た分だ、よく番をしてないと誰のおっぱいに吸いつくか知れねえぞ。

綾子　よして下さい。

清之助　若旦那、私ももう赤んぼじやないんですから……

新太郎　おや〜怪しいぞ、お前たち罪の深い事をすると小玉がどうなるか知ってるか、小玉は
前を水晶の玉のように汚れて無いと思うから可愛いがつているんだ、そして一生手の中に
握つていたいんだ、お前が可愛い〜ばかりに好きな酒もやめたんだ、酒乱になる程の酒も
止めてお前を大切にしているんだ。

清之助　まあ姉さんはお酒を上るんですか。

新太郎　お前はまだ子供だったから知るめえが、あいつはお前の世話をし度いばかりに禁酒を誓ったのだ。

綾子　まあ、そんな事があつたんですか。

新太郎　あいつはみより頼りも無い女だ、弟と思つて世話をしたいから許してくれと俺のおふくろに頼んだんだ。

清之助　それで禁酒したんですか。

綾子　だつて、姉さん位の芸のある人が、一人や二人の芸人の世話する位あたり前じゃありませんか、やつぱり元が田舎の人だから野暮なのね。

新太郎　何を云つてやがる、情しらず！　手前なんかそんな氣持分るか、その酒の為には、あの女には悲しい思い出が沢山あるんだ、その酒故にさ、別れとも無い人とも別れてるんだ、あいつの楽しみは今此男一つにかゝつてゐるんだ。

綾子　女の楽しみが坊やおつぱいを吞ませるだけになつちやおしまいね。

新太郎　だまれ！　それだけがあの子の楽しみなんだ、清ちゃんに甘えて貰うこと、それだけがあの女の望みなんだ。

綾子　どんな甘え方を望んでるんだか知れたもんじやないわ、思うようにならなけりや、ぎゅ

うと手の平の中にしめてしまおうでしょうよ、そんな可愛いがり方はほんとの可愛いがり方じゃないわ、一人前の男を殺すようなものだわ。

新太郎　へんお前なら好いのか。

綾子　私帰ります。

清之助　二人で一緒に帰ってあの鏡台に顔をうつして見ろ、まともには映らないぞ。

二人すくむ。

新太郎　さ、帰って見ろ、只じや済まねえぞ。

この時元氣よく小玉の「只今」と云う声がして格子が開く音。綾子急いで立上つてお香代の部屋へ隠れようとするが、新太郎が立ち塞がつて入れない。清之助もうろたえる。

小玉　（風呂敷包を持って、上つて来て此態を見て無言で立つ。）

清之助　こんちわ。

小玉 (それには返事せず、落ついて火鉢の側へ行き、綾子を見て) めずらしいお客様ね、若旦那のお迎えですか。

新太郎 お香代はどうしたんだ。

小玉 見番の前で別れました。私は買物に廻ったんです。

新太郎 鏡台を見に寄ったつて訳か。

清之助 ほんとに姉さん、昨夜立派な鏡台を届けて頂きまして有難うございました。あんまり立派なので、お祖母さんは目を廻してしまいました。

小玉 (冷たく) お前さんはどうなの。

清之助 そりやもう、私もおかげ様であんな鏡台の前に坐れる役者になったのかと思つて……

小玉 でもお前さんはあの鏡台を私に見せる前に見せた人があるんだろう？

清之助 あれが届いたので直ぐおしらせに上るつもりだったんですけれど、お祖母さんが何でも見度いと云うので……

小玉 お前さんのお祖母さんは大そう若い芸者だつてね、その上、大層気が利いて居て、もう鏡台前もすつかり揃つたんだね、なんだいこんな物。

小玉 それまで側にあつた風呂敷を投げ出す。中から種々の小箱やその外化粧品が転

げ出す。

清之助　でも化粧前までお世話になり度くないと思つて。

小玉　見立てる人が従っているからね。

綾子　姐さん、妙にあてつけるわね、そうよ、私が見立てたのよ、あれ程立派な鏡台の前にあんまりちやちな物を並べられないと思つてね。

清之助　それに僕も鏡台前だけは自分の趣味に合ったものを飾りたいと思つて。

小玉　じゃア、あの鏡台はお前さんの趣味とやらに合わなかつたと云うわけね。

清之助　そんな事はありません。決して、とても私風情には勿体ない位のお祝い物です。

小玉　うまい事を云うわね、気に入らなきや気に入らないとはつきり言っておくれ、それに今聞きやお祝い物だつて？　随分お前さん、水臭い事を云うわね。姉が弟にしてやるのだよ、おつかいものじゃないのだよ。

綾子　それじゃ私だつて昔の仲よしにお祝い物の一つや二つしたつて好いじゃありませんか。

小玉　お前さんなんかの稼いだお金で、私の大切な弟のお祝い物なんかして貰いたくないのよ。

鏡台前が汚れるよ。

清之助　姉さんそれじゃ私の立つ瀬がありません。綾ちゃんだつて悪気でしたんじやありません。

それじゃあ何一つ人様から頂けなくなるじゃありませんか。

綾子 姐さん、清ちゃんはあるんだの子じゃないのよ、自分の子だってあの人のようになし

くしていられるもんじやないわ、私齒がゆくてたまらないわ。

新太郎 あゝ面白い〜フレ〜、フレ〜。

香代 (突然上つて来る) 何を云い合つてるのよ、表通る人見てるわよ、みつとも無い、まア若

旦那もいながら何ですよ。

新太郎 さよなら(急に出て行こうとする)

香代 若旦那はこの人を連れてつて下さい。清ちゃんは裏梯子から、兎も角も帰つて頂戴。(お

香代、清之助を自分の部屋の方へ連れて行く。新太郎、綾子を引張つて下りる)

小玉 黙念と座っている。かなりや啼く。又近所の稽古三味線ポツン〜と聞え初める。

香代 (帰つて来て) 姐さん清ちゃんはね、急に話がきまつて今夜旅へ立つんですって、昨夜も

ね、それで寄合があつて来られなかつたんだって……

小玉 (ぼんやりと、お香代を見ている)

香代 それでね名題披露はさらい月になりましたから何れ帰り次第に伺いますって。

小玉 (黙っている)

香代 いゝの分つたの？ くれぐもよろしくつて。

小玉俄かに立つてお香代の部屋からウイスキーの瓶を持ち出して呑もうとする。

香代 まア何をするの姉さん、いけない、あんた切角絶つたお酒を、駄目ですよ、お放しなさい
(瓶をうばい取り隠す)

小玉 あゝ、世の中にはまじめなものは一つも無いのね。

香代 それは仕方が無いわ、もとゝゝこんな稼業をしてるんだもの仕方がないわ。

小玉 私はね、こんな世の中にもあの子だけはまじめだと思つていたのよ、私の心はよく分つてると思つていたの、あの子は私だけを頼りにしているのだと思つていたのよ、けれどももう駄目ね。

香代 そんな事は無いわよ、何かのゆき違いよ、あの人は姐さんをほんとに頼りにしてるのよ。

小玉 もう駄目、私は脇目もふらずに来たのよ、私自身はこのまゝで終つてもあの子だけはと思つて来たのよ、もう時代が違つてる事も何も気がつかずに来たのね。

香代 そりや仕方がないわ我慢しなくちや、どんな事があつたか知れないけど、私、これには

若旦那が一枚買つてると思う事よ。人と人の間にもんちやくを起させるのが面白いのよ。その中静かに清ちやんと話せば分るでしょう。

小玉　もう厭、厭——あの子を世話するに就いちやいろいろ意見をしてくれた人もあつた、けれど、私はあの子を見込んで手しおにかけたのよ、いくら昔馴染かshれないけれど、昨日今日めぐり逢つた女を人の留守に連れ込んで……もう厭だ、不見転とでも何とでも一緒にするが好い。(又瓶を取ろうとする。お香代渡さない)

香代　あんなもの清ちやんが相手にする筈無いわよ、そんな風に思い込むのは早いわよ。

小玉　いゝえ私だつて年が若いわけでは無し何もあの子を如何だと思つた事も無い、ゆくゆくは好いおかみさんも持たせてやり度いとそんな事まで考えていたのよ、あんな奴に、あんな奴に出て来られようとは思わなかつた、清ちやんもあんなまり人を踏みつけにしている。

又お香代の持つている瓶を取ろうとするが、抱え込んで渡さない。

香代　折角絶つたお酒をいけません、罰があたるわよ、あんなもの清ちやんが相手にするものですか、そんな事をしては姐さんに済まないわよ。

小玉　済むの済まないのと云う時代はとうに過ぎてるんだよ、私は小さい時から親は無し、兄

弟は無し、ほんとに淋しい身の上だったけれど、あの子の世話をするようになってからは、好きなお酒も止めてしまったし、悲しい思い出も忘れてしまったんだ、身体も綺麗にし、芸で稼いであの子が出世するのが楽しみだったんだよ、そのためにやア随分無理な働きもしたわ、笑われもしたし馬鹿にもされたわ、でもあの子が一人前になるのが楽しみで我慢しつづけて来たんだわ、綿に包んでしまつて置いたお雛様を通りすがりの鼠に引きずり出されてもみくちやにされたようなもんじゃないか、あゝもう我慢が出来ない、香代ちゃんお願い一杯だけ一杯だけ吞ましておくれ、頼む、もう頭がめちやくちやになる。

小玉頭をかきむしる。お香代瓶を抱えたまゝ、じつと悲しげに小玉を見入る。

幕

第二幕第一場

前幕と同じ道具。夜、上手の部屋に灯。真中の部屋にも電気、箆笥の前に敷紙に包んだ小玉の座敷着。下手縁側の籐椅子の前に小卓を出し、かなりやの籠を置く。下手の桜の梢に灯がさしている。

前幕の翌日の夜六時過ぎ、遠くより騒がしきレコードの音。

幕開くとお通、派手な束髪に結い外出らしき着付にて、煎じ茶を入れた湯呑を盆に載せて上つて来る。

お通

(火鉢の側に置き) お香代姐さんお薬が出来ました。

香代

(部屋の中から) あ、其処へ置いて、一寸待つてて！ 頂戴。

お通立つて鏡台の前へ行つて、顔を写して見たり合せ鏡等している。

香代、外出の着付、首に白絹のハンケチを巻き、前場よりもひどく瘦れたる姿にて片手に小さなスーツケース、片手にシヨールを持って出て来る。お通、急いで鏡台の前を離れる。

香代 アラ、お前さんさつきいらないと思つたら髪結さんへ行つたの、ハイカラなんか結つてママさんに怒られるわよ、嫌いだから。

お通 (すまして髪を気にしている)

香代 (火鉢の側へ座つて) ねえちよいと、何だつてハイカラなんか結つたのよ。

お通 (少しふてぶてしく) 若旦那がきつと似合うから結つて見ろとおつしやつたんですわ。

香代 いつそんな事云つたの。

お通 ゆんべ、小玉姐さんのお勘定持つて塗長さんそこへお使いに行つた時、彌生軒の前でお目にかゝつたんですヨ。

香代 又あすこで呑んでいたのね。

お通 そんな事知りませんが、今日おばさんが熱海から帰つたら、晩に映画見に連れてつてやるから、ハイカラに結つておけとおつしやつたんですよ。

香代 まあ、よその家の奉公人をそんな勝手な真似出来ないわよ。

お通 でもうちのおかみさんだつて、おばさんが帰つたら一と晩遊びに出してやるとおつしやつたんですもの。

香代 あんたね、今朝早くママさんから電話の時、きんのごたくの事しやべりやしないでし
ようね。

お通 (あいまいに) いゝえ。

香代 なら好いけど、ママさんが帰つて来ても黙つてるのよ。

お通 はい、はい。

香代 何よ重ね返事なんかして——兎に角今夜出かける事は駄目よ。

お通 (反抗的に) どうしてですの。姐さんが若旦那と一緒にいらつしやりたいんでしょう？

香代 馬鹿にしてるわ。今夜はね、私が熱海へ行かなくちやならないのだから、おばさん一人
じや困るのよ。

お通 アラ、姐さん熱海へお出かけになるの。

香代 そうよ、あれから電話でね、今日中にどうしても来いと云つて来たのよ。

お通 (立ちかけて) きつと叱られるのよ。

香代 何故さ。

お通 (馬鹿にしたように) だつて、姐さん、きんのの試験駄目だったんでしよう、知つてます
ようだ(急いで行こうとする)

香代 ちよいとくまだ用があるのよ。

お通 (立つたまゝ) 何です。

香代 ママさんがね、おはなれの用筆筒のかくし筆筒の中に指輪のサックがあるから、私の来

る時持つて来てくれつて。通ちゃんを知ってるから出してお貰いつて云ったから出して来て頂戴。

お通 (少しどぎまぎして) かくし筆筒ですつて？

香代 そうよ、知らないの？

お通 あたし、よく分らないけど。

香代 じゃア私探して見るわ、どうせママさんの事だから鍵なんかかゝつていないのでしよう
(立ちかゝる)

お通 (慌てゝ) いいえ、私行つて見ます。

香代 青いサツクのと赤いのと二つだけよ。

お通 え？ (おどおどして) 赤いのと青いのですか。

香代 エ、そうよ。ダイヤと真珠のだつて。

お通 あゝあれ？ (思い出したように) あれならふく、さに包んでしまつてありますわ。

香代 大丈夫？

お通 大丈夫、分つてます。直ぐ持つて来ます。(急いで下りて行く)

香代 おかしな人。

香代、盆の上の煎じ薬をにがそうに呑み、時計を見て立ちスーツケースを持って藤椅子へ行く。格子の鈴の音「今晚は」と云う声がして直ぐ見番の男衆上つて来る。

男衆 (ずん／＼部屋の中へ入つて来て) おやお香代姐さんどうなさいました。

香代 エ、少し風邪気でね。(構わず立つて、卓の上の鳥籠を持ち上手の部屋に入る)

男衆 それはいけません。えゝと小玉姐さんのお着替えは出ておりませうか。

香代 (部屋の中から) 其処の敷紙の中に出してありますよ。

男衆 どうも憚り様で……では後程お迎いに参りますから。(出て行こうとする)

香代 あの、姐さんは何時頃になるかしら。

男衆 只今お送り申して来る途中で若松の若旦那にお目にかゝりましたら、何か姐さんにお話があるそうで御一緒に彌生軒にお入りになりましたが、あとのお約束が七時半ですから、もうおつつけお帰りになりましたよう。

香代 あゝそう。

男衆 では御免下さい(下りて行く)

出て行く格子の音。香代又時計を見る。急に立つて階段の上り口へ行く。

香代 通ちゃん、まだなの？

お通 (下から) はい只今。

小ぶくさに包んだものを持って上つて来る。途端に下で電話のベル烈しく鳴る。お通直ぐ立とうとする。

香代 好いわ。きつと又ママさんからだから私出るわ。あんたね、それを其鞆の中へ入れとい
て頂戴。大丈夫 間違いないわね。

お通 大丈夫間違ありません。青いのと赤いのでしよう (お通鞆の側へ行く)
婆や (下から) お香代さん、熱海からお電話ですよ。

香代 今行くわ、通ちゃんちゃんと入れていて頂戴。後で調べるから (下りる)

お通鞆の中へぶくさ包を納い、ほつとしている。——香代の部屋の襖が開いてそつと
新太郎が覗く。

新太郎 (忍ばせて) おい、おい。

お通 (びつくりして振り向くが、新太郎が招くので側へ行く)

新太郎 お前、あの指輪を何処へやった。

お通 お人形の袖に入れといたまゝですわ。

新太郎 嘘をつけ、ゆんべ俺が出しに行つたら無かつたぞ。

お通 でも私知りませんわ。

新太郎 あの事を知つてるのは俺とお前としかいないのだけ、あすこに無けりやア貴様が盗つたんだ。

お通 あら、そんな事。

新太郎 あれを盗つたとなると貴様、この家から縛られて行くんだぞ。

お通 でも私……

新太郎 貴様、この家から早く逃げて深川の家へ行つてろ。あとは俺がうまくしてやる。

お通 でも……

新太郎 叱ッ、誰か上つて来る。

新太郎襖をしめる。お通うろくしてゐる。

香代 (上つて来て) 通ちゃん何をしてるの、指輪は入れといて呉れた？

お通 えゝ入れときました。

香代 そしたらあんた早く下へ下りて今の中にお湯へ行つて来て下さいって。

お通 はい(うつろに返事しながら坐ってる)

香代 何をぼんやりしているのよ、おばさんの都合があるんだから早くおしよ。

お通 姐さん、ものを盗むと懲役にやられるの？

香代 当り前じゃないの何を下らない。そんな事を云つてないで早く行つといで。

お通 じゃ、さよなら。(ぴよこんとお辞儀をして下りて行く)

香代 馬鹿だよ、あの子は、お湯へ行くのに「さよなら」もないもんだ。

香代 鞆の側へ行き中を改めようとする時、手荒く格子の開く音がして何か云い合う声。直ぐにひどく酔つた小玉が上つて来る。出の着物、ばちを帯の前へさしている。婆やがついて上つて来る。

小玉 何を云つてやがんだい、行こうと行くまいと私の勝手だよ。

婆や　でも姐さん、もう七時過ぎましたよ。

小玉　お座敷なんか七里けつぱいだ。お前見番へ行つて断つて来ておくれ。小玉は急病ですつて。いいかいしつかり断つて来るんだよ。電話なんかじやいけないよ。早く行きなつたら。

(紙入を投げつける)

婆や　しようがありませんね(ぶつぶつ云いながら下りる)

香代　まア妓さんそんなに酔つてどうしたんですよ。

小玉　どうもこうもあるもんか、さしつさゝれつ呑んじやつたんだよ。

香代　姐さん、私は姐さんを待つていたんですよ。そんなに酔つて来ちや困るじやありませんか、誰に呑まされたんですよ。

小玉　誰に呑まされようと大きにお世話だよ。酒でも呑まなくちやいられないよ。(ばちを投げつける)

香代　危ない。そんな乱暴をして……あゝ分つた、若旦那ですね。彌生軒で呑まされたんでしよう、きつと。

小玉　感心！お前さんも大きに話せるね。あ、いけない、若旦那はお前の情人いとこだつたね。済まない、だけどね、あの人は好い人だよ。お前さんのような意地悪はしないで、ちやあんと私の心を察して呑ましてくれたよ。

香代 まア飛んでも無い姐さん。一旦絶つたお酒を呑んだりしちや罰が当たりますよ。

小玉 罰が当りやア結構じゃないか。どうせ要らない体だよ。(手を叩いて)おばさん、二三本一緒につけて来てお呉れ。これつぱつちのお酒じゃ何にも忘れられやしない。おい香代ちゃん、お前の部屋にあるウイスキー持って来よう(立とうとする)

香代 (押えて)いけませんよ姐さん。姐さんは昨日一日考え込んで、今日は思い返してお座敷へ出て行つたのじゃありませんか。もうもう、何もかも忘れて下さいよ。

小玉 思い返して見たなれどサ、何も彼もが癩に触つて堪らないんだ。座敷へ出れば出るであの鏡台の事が評判になつていてさ、来る奴も来る奴もお目出度うの何のつて私ア穴でもありやはいり度いよ。

香代 そりや悪気で云うんじやありませんよ、皆さんが祝つて云つて下さるんですよ。

小玉 (開き直つて)香代ちゃん。私ア鏡台を取り返そうと思つてるんだよ。

香代 鏡台を取り返す? そんな馬鹿な事が姐さん。

小玉 あはゝゝゝ嘘だよ、まア一杯行こう……何だお酒はまだかい(手を叩いて)おいおばさんお酒はどうしたんだよ。

香代 そんな事よか姐さん。又ママさんから電話で、私今夜中にはどうしても熱海へ行かなくちやならないんですよ。だから私さつきから姐さんの帰るのを待つていたんですよ。

小玉　へえ、お前さんまでが私を捨て、行つちまうのかい？　結構だね。この中で湯治場行き

とはのんきな御身分さね。(ごろりと横になつて寝ようとする)

香代　(引き起して) 姐さん、そんな情けない事を云わないで聞いて下さいよ。私は姐さんの事

が心配だから、片時だつて離れていたか無いんですけれど、試験にはしくじつてしまふし、若旦那とはあんな事になつて私アほんとに死んでしまいたい位ですよ。でも一度はママさんにも逢つてお詫びもしたいし、ママさんに逢えば今度こそもう田舎へやられつきりになつてしまつて、もう姐さんにも逢えないかも知れないから。

小玉　田舎？　結構じゃないか。私なら二つ返事だね。所が私は駄目さ、私ア清之助の鏡台の勘定を払つてしまつたら、もうすつからかんの裸虫さ。いゝ年をして前借でもしなきやならない身の上だからね。――ほんとに盗人に追銭とはこの事さ。笑わすわねえ、私ア清之助のおかげでこれから先き何年芸者をしていけばいいのだい？　お座敷へ行つたつてみんなの顔が私を笑つてる様に見えて仕方が無いんだよ。

香代　姐さんもうその事は忘れて下さいよ。私はどつちにしても一度は帰つて来たいと思ひますけれど、どうか体だけは大切にしてくさいね。たとえ私ガもしも此まゝ帰れないようになつたとしてもねえ(泣く)

小玉　なんだい、そんな不景気な顔をして、こんなものを取つておしまい！

小玉、お香代の首に巻いたハンケチを引く。香代、よろけて倒れるはずみに懐中から小さな瓶がころげ出す。小玉手早く取つて見る。

香代　姐さんそれを……

小玉　（香代の出す手を打つて）アラ、これは私の眠り薬じゃないか。眠れぬ夜半のつれづれにさ。こりあ私の可愛いお薬だよ。お前なんかには用は無い筈だよ。

香代　でも姐さん私に下さい。

小玉　馬鹿、馬鹿、こんなものをどうするんだ、呑みすぎたらそのままお陀仏だよ。（懐中へ深くしまい込む）

香代　姐さん（泣いてしまう）

小玉　何が悲しいんだ。そんな事より好い事を話してやろう。香代ちゃん私はね、今度こそ若旦那とどうかなつちまおうかと思つてるんだよ。お前さんそれでも好いかい死なれるかい？

香代　まア姐さん何を云つてるんですよう。

小玉　さつき彌生軒へ連れ込まれて呑んでいる時にさ。いきなり私の手を掴んで、俺を亭主に

しろ、それがお前の運命なんだとじつと顔を見られた時にはぞおつとしたね。

香代　　まア姐さん、それがあの人の手なんですよ。あの人は恐ろしい人ですよ。

小玉　　いゝえ、私は嬉しかったね。香代ちゃん、私ほんとの事を話すとね、私ア昔からあの人が好きだったのだよ。好きで好きで堪らなかつたのさ、でもサ、若旦那はお前さんとあんな事になつてしまつたし、私ア主人の息子とみだらな事は出来ないと思つてあきらめてしまつたのさ。

香代　　まア姐さん……

小玉　　その中にあの人は何だか氣狂い染みて来たからもうすつぱりと思ひ切つて、一生男は持つまいと思つていただけれど、よんどころない義理にからまれてママさんのお世話で、さるおん方のお世話にはなつていたけれどさ、一日だつてあの人の事を忘れた事は無いんだよ。

香代　　姐さんそんな馬鹿な事を。

小玉　　まアお聞きよ。その癖あの人の顔を見ると憎らしくて憎らしくて仕方が無いのさ。でもさ、大切にしていた旦那からお酒の事で縁を切られてしまつてからは、私ア体の持つてきようが無かつた所に、あの清之助が見つかつたので、私はもうふつりと男の事もお酒の事も縁を絶つてしまつて、あの子を育て上げようと思つてサ。馬鹿らしい。何年も苦しい

思いをして暮してきたのに、あんな不見転芸者にそゝのかされて寝がえりを打たれてしまったんじやア只今のお笑い草さね。私ア元の浮気女に返つてこれからは好きな事をして行く積りさ。

香代 姐さんそんな戯言を言つてないで、私もう行かなくちやならないのですから、少しはしんみりとした話をして下さい。

小玉 しんみりとした話？ あゝそうそうお前さんに聞かしてやらなくちやならない手紙があったんだよ。ああ何だかお酒が覚めちやつた。その前に一つ景気をつけなくちや（手を叩いて）お婆さん、お酒はどうしたんだよ、香代ちゃん見て来てお呉れ。

その時丁度婆やお酒を二本つけ、つまみ物など載せた盆を持つて上つて来る。

香代 あらお婆さんいけないわ。

香代が取ろうとするのを小玉素早く奪つて、

小玉 吞ませなけりや聞かせないよ。

香代　じやあ一杯だけですよ。（言いつつおばさんを目顔で去らせる）

香代徳利を取つてちよこにつごとするのを小玉奪つて最前の香代の湯呑について呑む。

香代　姐さん駄目ですよ。

小玉　さあ好し、しつかり聞くんだよ。（懐中からくしやく／＼になつた手紙を出す）

香代　誰からの手紙ですの。

小玉　若旦那の所へ昨日清公が小田原へ立つ前に置いて行つた手紙だよ。

香代　清ちやんがですつて？　あゝそれじやアお詫びの手紙ですね。

小玉　所がさにあらずだね、私にはほうり出されたつて若旦那を後楯にすりやア大丈夫だと思つてる所があいつの利口馬鹿さ。みんなあの不見転のさし金なんだ。

香代　何が書いてあるんです。

小玉　お前さん聞ukaiか？

香代　えゝ聞きますとも。

小玉　お待ち。

小玉又酒を呑む。その間に香代手紙を拾つて読み始める。

小玉 (気がつき) 何だい自分一人で読む奴があるかよ、お出し(取ろうとする)

香代 (かくして) いゝえ私に読まして。

小玉 読むなら私に聞えるようにはつきりと読んどくれ、初めの方は好い、さわり丈で好いんだよ。

香代 えゝと(読み初める所を探す)

小玉 えゝじれつたいね、お出し(取ろうとする)

香代 (放さず) 私に読まして。

小玉 なら、早くお読みなね。

香代 読むわ(手紙) ……私も今度初めて自分が籠の中の小鳥だと云う事がよく分りました…

…

小玉 籠と云うのは私の事さ。

香代 まアこんな事を…

小玉 さア読んどくれ、お前が読めなきや私が読む。

香代 いゝえ、いゝえ、私が読みます。(手紙)小玉姐さんには随分長い事お世話になりました、

けれども私も一生籠の中で飼われる小鳥でいたいとは思いません。少しは大きな空へ出て飛んで見たいと思います。私はもうえさで飼われなくとも一人で生きて行けると思っています。――まアあの方がこんな事を……

小玉 (うつら／＼と聞いていたが目を覚まして)おもしろいじや無いか、籠の中の小鳥が大空を飛べると思ってるのが、ちゃんちやらおかしいよ。さ、お出し、今度は私が読むよ。

香代 いゝえ私に読まして下さい。

小玉 読むならばつきりとお読み、私の身にこたえるように読んでおくれ。(ごろりと寝ころんでしまう)

香代 (手紙)私は初めて故郷を知ったような気がします、気が延々としました。籠の中を出て空を飛んだらどんなにいい心持だろうと思います。私にそう云う心持を教えてくださいましたのは綾子です。綾子は私に呼吸を吹き込んでくれたのです。私は綾子に教えられて目が覚めたのです。

小玉 (うつぶしたまゝ)目が覚めたのは私だよ。

香代 (なお読む)私は姐さんに育てゝは頂きました。けれ共、あの人は私に飛ぶ事は教えては呉れませんでした。私はもう姐さんのお世話にはなつていられません。(段々早く読む)私

はこれから一人立ちになり度いと思えますけれど、私のようなものにはとても覚束ないかも知れません。此後はどうぞ若旦那のお力で私を好い役者にして下さいまし。姐さんのような方にお世話になつてゐる事はお互いの為めにならぬと綾子も申します……いえいえ、これはあの人の本心じやありません、綾子さんが悪いのです。

小玉　　そう思うお前は甘いのだよ。好い氣であの子の一生を見ようと思つていた私が馬鹿なんだよ。

香代　　そんな事はありません。姐さんお願いだからもう一度清ちゃんに逢つて御覧なさい。今頃はきつと後悔してますよ、済まなかつたと泣いてるかも知れません。

小玉　　おい香代ちゃん、私には血が通つてるんだよ。一時ののぼせで書いた手紙にしる、それを聞かされる私の心持がどんなだかお前さんには分らないのかい？

香代　　でも清ちゃんはこの手紙をまさか若旦那が姐さんに見せようとは思つていませんわ。若旦那はほんとに悪い人です。

小玉　　あの人はこの手紙を私に見せる前に、何人の人に見せたか分りやしないんだよ、あゝきつとみんなが見ているんだ。だからみんな笑つてるじやないか、あゝ笑つてるよ、（急に狂おしく）そらお聞き、あつちでもこつちでも笑つてるじやないか。あゝおかしいだろう、私だつておかしいもの、はゝゝゝ、おかしいね、あはゝゝゝ、おかしいね、あゝおかしい、あ

はくくあはくく。

小玉狂気のように笑い出す。笑いは次第に号泣に変わり、泣き倒れてしまう。

香代 姐さん、姐さん困ったわねえ……

小玉次第に静かになり、寝てしまったように見える。お香代そつと立って戸棚から薄いかいまきを出して小玉にかけてやる。

婆やが下からそつと上つて来て覗く。小玉が寝ているので香代を招く。香代その側へ立つて行く。

婆や もうお出なさらないと時間がありませんよ。

香代 あくそうだつたわねえ、でも私、姐さんが心配だから、止そうかしら。

婆や そりやいけませんよ、そんな事なすつちや好くなる事も悪くなります。おかみさんは好い方ですから悪いようにはなさいませんよ。

香代 そうかしら？ でも姐さんが……

婆や (覗いて) およつたのでしよう、およれば大丈夫です。私が様子を存じてますから気がつけます。

香代 大丈夫かしら!

婆や 大丈夫ですからこの間に早くお出かけなさいまし。終列車に間に合わないといけませんですよ。

香代 そうね、じやあ頼んでよ。(支度をしながら) 通ちゃんは帰つて来て?

婆や それがね、私が見番へ行つてる間に出かけてしまつて未だに帰らないんですよ。それにね、あの子の荷物もないんですよ。

香代 まあどうしたんでしよう。

婆や いつものあの子の癖ですよ。何か気にいらぬ事があるとやるんですよ。

香代 おばさん一人で困りやしない。

婆や 私が又心当りを探しますから御心配くお出かけなすつて下さい。そこら迄行けばタクシーがありますよから。

香代 では後頼むわね。(名残り惜しげに小玉を見て出てゆく)

婆や隅にあるスタンドの灯を点け、香代のスーツケースを持ち追いついて立っているようにし

て下りる。電気消えてスタンドだけの光になる。小玉かいまきを冠る。何処からか静かな三味線の音色。

長い間。

小玉静かに起き上る。暫く思いつめたように坐っていたが、懐中から以前の薬の小瓶を出し湯呑に湯をつぎ呑もうとして呑み得ず、茶碗を置き其のまゝ薬を又懐中に入れ、かいまきを冠つて寝てしまう。(間)

格子の開く音、人声、電灯点く。

新太郎 (上つて来る。下へ向つて) おいおいぶつけないように上つてくれ。(小玉を見て) 何だ、寝てるのか。おいお玉さん鏡台を持って来たぜ、起きて見な。

新太郎の後より二、三人の男立派な鏡に唐草の風呂敷を掛けたものを運んで来る。

男衆 旦那、どちらへ置きましょう。

新太郎 あゝその辺で好い。

男達、好き所へ鏡台を置く。

新太郎 御苦労、御苦労。(男達に心付を遣る)

男衆 旦那 ありがとうございます(一同下りる)

新太郎 さあ、おい、お玉さん。お前の命令通り鏡台を持って来てやったよ。起きて見なったら。

新太郎 伝いすて、香代の部屋に入り、ウイスキーの瓶とコップを持って来て籐椅子に掛け、一杯呑む。香代の部屋から綾子が覗く。新太郎が手を振るので引込む。

新太郎 鏡台の側へ行き風呂敷を取る。蝶貝入り朱塗の立派な鏡台。三面鏡を開く。

新太郎 そら見な。こうして見ると立派なものじゃないか、おいお玉さん。

新太郎 お玉の側へ寄りかいまきを剥ぎ、小玉の手を取る。小玉それを振り払っておき上り、じつと鏡台を見るが矢庭に起き上つてあり合うもので鏡を打とうとする。

新太郎 何をするんだ。

新太郎が止めるのを振り払って、又打とうとする時、綾子飛び出して来て、小玉の腕を押える。

綾子 姐さん、清ちやんの鏡台を如何するのよ。

新太郎二人の側をどき藤椅子へ掛けて酒を呑む。

小玉 お前さん又来たのかい。人の家へずかく上つて来て失礼じゃないか。

綾子 私は若旦那が従いて来いと云うから来たんです。姐さんは清ちやんの鏡を割つてどうするつもりなの。

小玉 どうしようと勝手じゃないか、代を払つてしまえ私のものだよ。

綾子 姐さんは一旦清ちやんに遺ると云つたものじゃありませんか。お願いですからそれを離して頂戴。

小玉 何を云つてるのだね、清ちやんと縁が切れば私のものだよ。自分のものをどうしようと私の勝手だよ、どいておくれ。

綾子 いゝえ、この鏡台をこわされちやあの人に申訳がありません。これを取られてしまつてはあの人はお終いよ。もうこの町内でこの鏡台の事を知らないものは無いのよ。

小玉 知らないものが無いから私が笑われるんだよ、柏屋の小玉があんな子供に踏みつけにされたんじや私の顔が立たないんだ。そんなに欲しけりやいくらでもお前が稼いでこしらえてやるが好い。

綾子 だつて名題披露はさ来月よ。それ迄にこんな立派な鏡台は出来やしません。あの人も皆さんには済まない事をしたと後悔してるんですから。

小玉 後悔してるか、して無いかお前さんによく分るね。

綾子 昨日途中まで送つた汽車の中で聞いたんです。行きがかりであんな事になつて姐さんにお別れしたのは済まなかつたと云つて泣いていました。

新太郎 籠の中の鳥はいつく来やる、と云つて泣いていたんだろう。

綾子 若旦那は黙つてらして下さい。ほんとに姐さんには御恩になつているのに申訳が無かつたと云つて私も叱られてしまつたんです。

小玉 そう云う口の下で、よくもあんな手紙が若旦那に書けたものだね、そう云うのが当世と云うのかい。

綾子 まアあの手紙を若旦那は姐さんに見せたのですか。そりや酷いわ、鏡台はうまく取り返

してやるから俺に従いて来いなんて云いながら。

新太郎 (うそぶいて) 面白い芝居が見られると思つたからさ。

綾子 でもあの手紙を見せるなんて……

新太郎 見せて小玉の目を覚ましてやろうと思つたからさ。

綾子 若旦那はどつちの味方なんです。姐さん、清ちゃんはある手紙を若旦那に書いた事も後悔しているんです、それも私が余計な事を云つたためだと言つて、直ぐ姐さんにお詫びに行つて来いと云われて私帰つて来たんです。

小玉 ではあの手紙を書いたのはお前だね。

綾子 いゝえ、いゝえ、あれは清ちゃん一人で書いたのです。

新太郎 籠の中の鳥は好い気になつて大空を飛んでるよ、とんびやか、かに喰われるのも知らずにね。

小玉 お前さんは黙つてゝおくれ。お前さんに何か云われると頭がくしやくする。

綾子 姐さん、あの人もこんな事になろうとは知らなかつたのです。私、清ちゃんに代つてお詫びします。どうか堪忍して下さい。(畳へ手をつく)

小玉 ふん、口は重宝なものだね。

綾子 あの人は決して姐さんの御恩は忘れてはいないのです。あの人は気が弱くてそんな事の

出来る人じやありません。私ゆんべ若旦那からも姐さんの御苦勞なすつた事さんぐ聞か
されました。姐さんは決して浮気で清ちやんを可愛がるのじやない……

小玉 いゝえ浮気だよ。私や大きに清ちやんに惚れてるのかも知れないよ。

綾子 いゝえ姐さんはそんな方じや無かつたのです。私が間違つていました。お詫びします。

小玉 (少しひるむ)

綾子 ねえ姐さん、鏡のお代の事なら、私がきつとどうにかします。私昨夜若旦那から頂いた
ダイヤの指輪を姐さんに上げますわ。ですからどうかこの鏡台だけは返して下さいね。

綾子指輪を抜いて小玉の指に差そうとする。小玉振り払う。指輪ころがる。新太郎
が手早く拾う。

新太郎 オットトット此奴を失くされちやあ大変だ。

小玉 若旦那、卑しい真似はしないで下さい。

小玉、新太郎から指輪を奪い綾子の手に戻す。

小玉 綾ちゃん、あんまり私をこけにしないでおくれ。お前さんにとつては此ダイヤの指輪は何よりも大切なものかもしれない。お前さんにそれだけの心があるなら、私が今迄に清ちやんにしてやつた事をみんな返しておくれ。

綾子 ですからお金の事ならどんなにしても稼いでお返しします。

小玉 お金の事を云つてるのじゃない、私の心を返して貰い度いのだよ。

綾子 そんな形の無いもの。

小玉 お前さんは形の無いものなら、踏もうが叩こうが如何でも好いと思つているのだね。あの子の為にした私の苦勞を返してお呉れ。

綾子 ですから私はこれから真面目に働いて姐さんのなすつた苦勞を私もします。

小玉 お前たちは私の生命を盗んだのだよ。さア、たつた今、それを返しておくれ。

綾子 そんな無理云つたつて仕方が無いじゃありませんか。私をどうしても好いから鏡台だけは、返して下さい。

小玉 いやだと云つたら。

綾子 カずくでも持つてくわ。さあ若旦那手伝つて頂戴。

新太郎 (大分酔つて来て) 一人でやれよ。

綾子 そう云う約束じゃなくなつてよ、さあ。

綾子 新太郎を引張る。新太郎払う。

綾子 頼まないわよ、姐さん持つてくわヨ。

綾子 鏡台を引こうとするが持てない。

新太郎 あはゝゝゝ（笑）

綾子 なお引こうとする。冷然と見ていた小玉突然煙草管で綾子の手を打つ。

綾子 痛い、打ったわね。エ、打って頂戴。いくら打つても鏡台は持つてくわよ。

綾子 なおも引こうとする。その手を又小玉打つ。

綾子 痛いじゃないの畜生！

新太郎 (大きく) 静かにしろ、近所があるんだ。

綾子無言に小玉にむしやぶり付く。小玉つき倒す。いろくあり二人組み合う。髪も乱れ、とゞ綾子の片袖ちぎれて長襦袢の友禪の袖血のように現われる。やがて二人共、
勞れて倒れてしまう。此間総てももの凄き無言。

新太郎酒の瓶を持つて立つて来て、小玉を引き起し手にしたコップを無言にて差す。
小玉夢中に受けて、ぐつと呑み、新太郎に差す。新太郎呑む。又小玉に差す。小玉呑む。
二三度あつた後、新太郎小玉の手を掴む。小玉振り払う。

新太郎 (小玉の肩を抱えて) 小玉、お前は どうして そう本心をかくすんだ。

小玉 私ア別れた旦那が大切なんです。

新太郎 嘘をつけ、何故俺に惚れたと云えないんだ。俺は昔からお前が好きなのだ。

小玉 私は嫌いです。

新太郎 貴様、そんないこじを云つてると生きていられなくなるぞ。

小玉 死にます。

新太郎 勝手にしろ。

新太郎 小玉を手荒く放し、綾子を起す。

新太郎 おいしつかりしろ、下へ行つて俺が介抱してやろう。

新太郎、綾子を引き起し肩にかけて下へ下りる。電灯の灯消えスタンドだけになる。

小玉倒れたまま、舞台段々に暗くなる。月の光、義太夫の流し遠くから近くへ、夜番の拍子木、近くから又遠くへ——舞台全く暗くなる。(間)

暗い中に裏口らしき雨戸を叩く音がする。「今晚は」——「今晚は」という声。

第二場

同じ場面、舞台段々に明るくなり、スタンドの灯となる。小玉顔までか、い、ま、き、を掛けて寝ている。枕元に茶碗が置いてある。鏡台には風呂敷が掛つている。小玉の側に清之助が坐つている。

清之助　姉さん、姉さん、——寝ているの？　清之助が小田原から帰って来たんですよ。昨日ね、私汽車へ乗ってから、急に姉さんの事が心配になって送って来てくれた綾子を横浜から帰したんです。そして小田原へ行ったら、道具の都合で初日が一日延びたんで今朝熱海のママさんそこへ行つたんです。そしたら今朝の通ちやんの電話で昨日の事を聞いたと云つていろ／＼聞かれてしまつて、何でもお前が帰って姉さんにお詫びして来いと云われて帰つて来たんです。

清之助　小玉姉さん、私が悪かつたのよ、堪忍して下さいね。綾子もお詫びに来たでしょう。私あしたの一番に乗れば間に合うからお詫びに帰って来たんです。私小さい時分の事、種々姉さんにお世話になつた事ママさんに聞かされてほんとに済まないと思ひました。私の一時の迷いからあんな乱暴な手紙を若旦那に上げてしまつて許して下さいね。姉さんは見ないでしょうけれど、私ほんとに後悔してゐるんです、私はあした又旅へ出てしまふけれど一度姉さんの笑い顔を見て行きたいんです。ねえ姉さん、おきて私の顔を見て下さい。ねえ、もう私を堪忍して下さいよう、姉さん、姉さん。

清之助小玉をゆすぶる。

清之助
姉さん。

清之助がいまきをめぐりて、小玉を抱き起す。小玉顔色変りてうつとりとしている。

清之助 (驚いて) 姉さん、姉さんどうしたの。

小玉 (幽かに口を動かす)

清之助 なアに、姉さん。姉さん清之助ですよ。

小玉 (うなずいて目を閉じる)

清之助 あゝッ。

清之助小玉を放して立つ、小玉倒れる。

清之助 (上り口に行き) おばさん、おばさん、早く来て、姉さんが変ですよ。

清之助又元へ戻り小玉を抱え起す。新太郎以前のまゝの姿の綾子を助けて上つて来る。電灯点く。

清之助 あ、若旦那、綾ちゃんもいたの（綾子の姿を見て）まア、どうしたの。

新太郎 後で話す、お前は綾子を（清之助に綾子を渡し小玉の後へ廻り躰を支える）小玉、小玉、
どうしたのだ、新太郎だよ。

小玉 若旦那、私をしつかりと抱いて、下さい。

新太郎 あいよ、抱いてるよ。

小玉 綾ちゃん、綾ちゃんは？

清之助 姉さん、綾子は此処にいるよ。

綾子 姐さん綾子ですよ。

小玉 ひどい事をして御免よ。

綾子 姐さん、死んじや嫌ですよ（縋りつく）

小玉 清ちゃん。

清之助 姉さん、此処にいますよ（小玉の上手へ廻る）

小玉 （二人の手を握り合せて）二人仲よくお暮しよ。

新太郎 おい小玉、今おばさんが医者へ行つたからしつかりするんだ。

小玉 いゝえ、若旦那、もう私を静かにさして下さい、もうこんな世の中は厭になつた。——若

旦那、二人に鏡台をやつて立さいよ。

新太郎 あいよ、引受けたよ、清之助の名題披露も派手にさせてやるよ。

小玉 (幽かに笑つて) ほゝゝゝ何だか当にならないねえ。……

淋しき笑顔にて落ち入る。皆々泣く。

幕

底本 現代女流戯曲選集 一九五六年版

著者 日本女流劇作家会 編

出版者 ひまわり社

出版年月日 一九五六 初版